

2021年横浜ナザレン教会・降誕節第四主日礼拝

「神の権威、人の権威」

ルカ福音書第19章 47 節から第 20 章 08 節

【聖書】

ルカによる福音書 19:47 毎日、イエスは境内で教えておられた。祭司長、律法学者、民の指導者たちは、イエスを殺そうと謀ったが、48 どうすることもできなかった。民衆が皆、夢中になってイエスの話に聞き入っていたからである。

20:1 ある日、イエスが神殿の境内で民衆に教え、福音を告げ知らせておられると、祭司長や律法学者たちが、長老たちと一緒に近づいて来て、2 言った。「我々に言いなさい。何の権威でこのようなことをしているのか。その権威を与えたのはだれか。」3 イエスはお答えになった。「では、わたしも一つ尋ねるから、それに答えなさい。4 ヨハネの洗礼は、天からのものだったか、それとも、人からのものだったか。」5 彼らは相談した。「『天からのものだ』と言えば、『では、なぜヨハネを信じなかったのか』と言うだろう。6『人からのものだ』と言えば、民衆はこぞって我々を石で殺すだろう。ヨハネを預言者だと信じ込んでいるのだから。」7 そこで彼らは、「どこからか、分からない」と答えた。8 すると、イエスは言われた。「それなら、何の権威でこのようなことをするのか、わたしも言うまい。」

1 権威を巡っての論争

今日からルカによる福音書は、主イエスの十字架にかかる直前の最後の数日間を描く部分に入ります。舞台はエルサレム神殿。主はここで弟子や民衆に教えながら、祭司長達・律法学者達・長老達と論戦を繰り広げます。ある神学者は、20章1節から21章4節までに「エルサレムでの論争」というタイトルをつけていたほどです。

では、何について論争されるのでしょうか。今日の聖書テキストにも出てくる「権威」について、もっと言えば、「主イエスの権威」を巡っての論争です。主イエスの権威を問う問いは、結局は、「主イエスは何者か」ということを問う事になります。主の最後の数日の論戦を見ていくことは、主イエスが何者であるかを見ていく事です。今日はその最初。主イエスと主を殺そうとする者達との論戦から、権威とはどのようなものか、私達が従うべき権威とはどういうものかを一緒に見ていきたいと思います。

2 神の権威は人を自由にする

権威とは何でしょうか。ある方に勧められた「権威と権力」という本を読んだ事があります。イエス・キリストとは全く関係のないのですが、権威についての優れた解き明かしがあります。著者は、精神科医でもあり作家でもあるなだいなださんです。そこに「権威も権力も人に言う事をきかせる力だが、権威は、人々が自発的に言う事を聞かざるを得ないような力で、権力

は、自発的ではなく、無理やり言う事をきかせる力だ」とありました。身近な権威のよい例として、医者の権威が挙げられます。病院では、医者の判断が絶対であり、看護師や薬剤師も医師の指示に反する処置や処方を行う事はできません。患者も医師の指示のもと療養します。医者は病院では最も自由に行動できる権威者です。しかし、患者が「この医者、ヤブじゃないか？」と医師としての力量を疑い始めると、その権威にほころびが出てきます。患者は医者の指示に心から従わなくなるでしょうし、病院を変える事だってありえます。権威者は自由な存在であるが、その権威者に従うか従わないかは、一人一人が自発的に判断できるものようです。

又、権威はそれを発揮する場所を持ちます。医者の権威は、病院でこそ発揮されます。一般社会で医者だというだけで、病院ほどに自由になるわけではありません。それは、医者など特殊技能者だけではありません。「一国一城の主」という言葉がありますが、私達は皆、自分が主人となれる場所を持ちたいと願う者かもしれません。子供でも、思春期ともなれば自分の部屋に、家族が勝手に入る事を嫌がるようになります。そこは自分が最も自由に振る舞える場所、王になれる場所と言ってもいいかもしれません。

さて、今日の聖書テキストには、祭司長、律法学者達、長老達が登場します。祭司長というのは、神殿の維持管理の様々なつとめをする祭司達を束ねる祭司職であり、神殿の祭儀に力を振るいました。律法学者は律法と聖書の研究者であり、人々の信仰生活に大きな影響力を持っていました。長老達は、エルサレム名門貴族の出身者であり、住民の自治を担っていたようです。ユダヤ人の間で権威ある最高法院(サンヘドリン)は、彼らによって構成されており、彼らはエルサレムの住民を従わせる力を持つ権威を持つ者達でした。そして、エルサレム神殿こそ、彼らが権威者として自由に力を振るう場所でありました。その場所を主イエスは「強盗の巣」と呼び、商人達を追い出したのです。商人達に商売を許していたのは、彼ら権威者達ですから、彼らを強盗と呼んだに等しいのです。自分たちのテリトリーだと彼らが信じる神殿で、自由に振舞う主イエスは、彼らの権威を損ないかねない脅威であり、排除すべき敵でした。2節で次のように主に詰めよるのも当然かもしれません。「我々に言いなさい。何の権威でこのようなことをしているのか。その権威を与えたのはだれか。」この場所を自由にする権威は我々にあるのに、お前は何の権威で私達の権威を損なうのか？と問うています。まるで尋問のよう。民衆の前で主イエスを貶め、離反させようという目論見もあったでしょう。

意気込む彼らに対して、主イエスは、静かに問い返します。「では、わたしも一つ尋ねるから、それに答えなさい。ヨハネの洗礼は、天からのものだったか、それとも、人からのものだったか。」洗礼者ヨハネは、イエス・キリストの少し前に現れた最後の預言者、ヨルダン川一帯で「悔い改めの洗礼を宣べ伝えた」とされます(3:3)。ヨハネの洗礼は、ヨルダン川に頭から全身浸かるものでした。水に浸かるとは、死ぬことを意味します。己を主人として生きた古い自分は死に、神のみもとに立ち帰って、神の支配のもとに新しく生まれ変わる事を意味する洗礼でした。彼のもとには、多くの民衆が集まって、悔い改めの洗礼を受け、回心していきま

す。主イエスも、人々に混じってヨハネから洗礼を受けられました。そんなヨハネの洗礼が人々を神に従わせる力は、神の権威か、それとも人の権威であるのか？と、主イエスは問うています。

答える律法学者、祭司長達、長老達の様子は、人の権威の不自由さを図らずも明らかにしています。“彼らは相談した。『天からのものだ』と言えば、『では、なぜヨハネを信じなかったのか』と言うだろう。『人からのものだ』と言えば、民衆はこぞって我々を石で殺すだろう。ヨハネを預言者だと信じ込んでいるのだから。』”(5, 6節) 彼らは、人がどう思うか、どう反応するか、ばかりを気にしています。ヨハネの洗礼によって多くの者が御神のもとへと立ち帰り、生き方を改める様子を見て、彼らも「これは神の力が働いている」と思っていたのかもしれませんが。しかし、それを認めれば「何故、ヨハネを信じなかったか」と反論され、自分たちの権威が損なわれるかもしれないと恐れます。また、「ヨハネの洗礼は人の力でなしたものだ」と言えば、ヨハネを神からの預言者と信じる人々が黙ってはいない。実力行使に出て自分たちは権威どころか命さえ危うくなるかもしれない、と恐れるのです。権威者とは、自由に行動できる者だと先ほど言いました。ですが、ここには自由な権威者の姿はありません。自分の権威を保とうとした時、権威は、権威者自身をも縛り付ける。人間の権威は、権威に従わせる人を縛り付けるだけでなく、権威者自身にも、不自由な生き方を強いる、人間の権威は不自由を産むと言えるのではないのでしょうか。

しかし、神の権威は違います。神の権威とは、イエス・キリストの十字架と復活に表される、義なる愛の権威だと言ってよいからです。自分を殺そうとする敵さえも赦す愛、憐れむ愛の持つ力です。この義なる愛の力は、主を甦らせた命の力でもあります。無から有を造り出す命の力を与える権威。主イエスは、この神の愛の権威に人間が従っていけるようにと、この地上へと来られました。神の権威、愛の権威は、人間の権威とはあい入れません。人間は神を殺して、自分たちが王となろうとするから。ですが、主はそのような私達の罪も引き受けて、十字架に架かかり、贖い出してくださり、三日目に永遠の命へと甦られました。そうして、私達が王になりたがる罪から解き放ってくださいました。ですから神の権威は、私達を自由にするのです。

そして、神の権威は私達を上から押さえつけ従わせる力ではありません。自発的に神に従い生きる事ができるように、私達を下から支える力だと言っていいと思います。私達は、人間の権威ではなく、神の権威に服する事で、周囲の状況に左右されて生きる不自由さから解放されるのです。しかし、自由にされる、というのは、自分の欲望のままに生きられるという事ではありません。人の欲望は際限がありませんから、欲望のままに自由に生きているようで、実際は欲望に囚われる不自由な生き方となります。そうではなくて、神の権威がもたらす自由とは、神の子の自由。敵を愛するような愛に生きる自由への道が開かれるという事なのだと思います。前にも紹介したが、マザーテレサの次の言葉がこの神の権威がもたらす愛の自由をよく表していると思います。「人は不合理、非論理、利己的です。気にすることなく人を愛しなさい。」

3 神の権威は考える事へと導く

さて、先ほどの、なだいなだの「権威と権力」には、権威について次のような鋭い指摘もあります。「権威には、人々を現実から遠ざける力がある」というものです。どういう事かという、「権威者である◎◎先生の言う事をそのまま信じれば、自分自身で現実と向き合い、色々と考え判断するという面倒くさい事をしなくてもすむ。なんでも権威者に頼ってしまえばいい」というものです。これも本当にその通りだと思います。人の権威は、思考停止をもたらすのです。私自身を振り返っても、学校の権威、会社の権威、上司の権威にもたれかかって思考停止して生きていた部分が大いにあるなあと、本当に恥ずかしく、神に申し訳なく思います。このような人の権威に寄りかかった思考停止は、教会にも見られます。カルバンがこう言っている、ルターがこう言っている、ウェスレーが、バルトが…、偉大な神学者の名前を、まるで神の御名のように唱えて自分たちで考えることをやめてしまう事が繰り返されました。権威者も、それを喜び、やがて、自分とは異なる意見に耳を傾ける柔軟な心を失う。そうしてどんどん神から離れて行ってしまふ、というのは、よくある事です。

しかし、神の権威はどうでしょうか。神の権威にこそ、問答無用に、人に考える事をやめさせるような力があるようにも見えます。はたしてそうなのでしょうか。ある時、母教会の牧師が「聖書を鵜呑みにするのはよくない。これはどういう意味か？と考える続ける事が大切」という趣旨の話しをしました。これを聞いた時は「聖書を鵜呑みにするなって、どういう事？変わったことを言う牧師だなあ」と思いました。ですが、後になって、「納得できないなら、納得できるまで考えたらいい。人の疑いくらいで揺らぐような天の御神でもないし、聖書でもない。神への信頼が堅いからこそ、聖書に真理があると信じ、安心して“これは本当か？”と考え求めていく事ができる」と気づかされました。神の権威は、私達を考える事へと導きます。今日のテキストでも、主イエスは、律法学者や祭司長達、長老達が驚くような不思議な業を彼らの目の前でしてみせればよかったかもしれません。そうすれば、彼らも、主イエスが神の権威をもって行われている事を信じたかもしれませんから。しかし、主はそうされませんでした。「では、わたしも一つ尋ねるから、それに答えなさい。」と問いかけられたのです。そうして主は、自分たちの権威を保とうと汲々としている彼らに、人間の権威と神の権威について考えるようにと促しているのだと思います。主イエスは私達一人一人が、神とはどのようなお方か、キリストとはどのようなお方かを祈り求め考える事を望んでおられます。それが私達の幸いとなるから、私達の信仰の足腰を強める事になるのだと思います。だからこそ、主は、エルサレムの最後の数日の少なからぬ時間を、自分を陥れ殺そうとする者達への議論に費やされたのだと思うのです。

が、「信仰に議論はなじまない」という考えもあります。確かに自分と異なる意見を持つ者を敵視して排斥するようでは、神の権威のもとにあるとは言えません。ある牧師が「相手のために祈ることのない人に、相手を非難する資格もない」と言ったのですが、なるほど…と思いました。相手を尊い者として尊重し、祈り合う事なしには、十字架と復活の主イエス・キリスト

の権威のもとでの議論はありえないのだと思います。今日の聖書でも、律法学者達が「ヨハネの洗礼は天からのものです。」と答えたなら、主イエスは、はたして彼らが想像したように「では、何故、ヨハネを信じなかったのか」と仰ったでしょうか。私には、主イエスは、「その通りだ。よく言った」と喜ばれたように思えます。しかし、律法学者達は、人間の権威のもとに生きており、キリストを自分たちと同じ人間として捉えてしまった、そうして、「どこからかわからない」と答えるしかなかったのです。敵さえも愛し赦すキリストの権威のもとでの議論、相手を尊びつつ行う議論が、私達の知識を本当に広げるのだと思います。より深く広く大きくキリスト・イエスを知り、天の父なる御神を知ることへと導き、私達をより自由にするのです。

そして、人間の権威は、自分たちの権威に服さない人に対する憎しみをうみ、共に生きることを阻害し、排斥させる権威です。今日の聖書箇所直前で、商売人を追い出した主イエス・キリストを、エルサレムの権威者達が殺そうとしたことからそれが判ります。私達が生きる世界、人間の権威が支配する世界はそういうことが頻発しています。先日、アメリカで起こった議事堂占拠事件などもよい例でしょう。トランプ大統領の権威を守ろうとした支持者達が、異なる意見を排斥しようと暴力行為に出ました。しかし、キリストの権威は、私達全てを権威者の地位から引き下ろし、意見の異なる人間に対しても尊重し合いつつ議論する道へと導きます。そうして、私達は、異なる考えの者達も共に生きる事ができるのではないかと思います。

4 コロナ禍のもとで

新型コロナウイルスの感染は世界中で収まる所を知りません。しかし、今こそ、人の権威を上から振りかざすのではなく、共に生きる事がますます重要となってきたと、台湾の指導者オードリー・タンさんのインタビューを読んで思われました。天才プログラマーである彼女は、台湾の素早い新型コロナ押さえ込みに大きな役割を果たしたと言われます。その彼女が新聞のインタビューで「台湾の新型コロナ対策が功をそうしているのは何故だと思いますか」と問われた時、「社会と行政と経済界との協力、全社会的アプローチだ」と答えました。記者が「しかし、三者の中で行政が大きな権限や影響力があります。人々が受身になりがちではないですか」と尋ねると、オードリーは、「そうは思いません。例えば行政は当初マスクをそんなに重視していませんでした。しかし、人々は2003年のSARSを覚えていて、マスクが感染防止にとっても有効だと知っており、マスクをつけ続けましたので、私達行政も考えを改め、マスク増産に尽力しました。行政が権威的な指示をするだけなら、こうならなかったでしょう」政府という権威に寄りかかり、人々に一方的に命令するのではなく、人々の知恵を行政が吸い上げ、みんなでコロナを封じ込めた、中国のようにネット技術を監視に使う事なく、情報共有に用いることで民主主義を傷めずに封じ込めたのだと語っていました。

しかし、人間の権威だけで、いつもそのように行えるかという、かなり難しい。人は皆、罪人です。自分が王様になりたいという利己的な思いを退け続ける事は、人の権威では不可能ではないかと思います。ですが、神の権威のもとであれば、可能とする道が開けます。そ

のように、ドイツのメルケル首相は私達に教えてくれます。彼女は東ドイツ出身の物理学者であり、牧師の娘で敬虔なキリスト者です。彼女の信仰関係の講演や演説を集めた「私の信仰」という本にはこういう言葉があります。「神を信じる人間として、自分が引き受ける課題の中に『へりくだり』も含まれていると言うのは、政治の世界ではとりわけ重要な事だと思います。それによってわたし達キリスト者は明らかに、“自分の力によって地上に繁栄をもたらすことが出来ると信じる人達”とは違っています。」「地上に繁栄をもたらす事ができる力が自分たちにある」という、人間の権威を信じる生き方ではなく、神の権威に生きているからこそ、自分はへりくだる事を課題として担う事ができ、それが多くの人の命に関わる政治ではことさら重要になる、と彼女は語っています。自分が権威者としてドイツに君臨し国民を支配するのではなく、神の権威のもと、神の僕としてへりくだって国民に仕える事こそ、政治家の役割だと言っているようです。「下手な事を言ったら支持率が下がる」と自分の権威を守る事に汲々とするのではなく、神の権威のもと、自由な言葉で愛する国民に語りかける彼女は、キリストの権威のもとに生きており、彼女の言葉が、コロナ禍の中でドイツの人々に連帯をもたらしているのだと思います。

5 共に福音の聞きつつ

SARS が2003年、新型インフルエンザが2009年、MERS が2012年、新型コロナウイルスが2020年。人類が短い間に相次いで未知のウィルスに襲われているのは、人間が自分たちの権威を主張し、地球の王様のように欲望に任せて地球環境を破壊したことが原因だと言われています。新型コロナウイルスを克服しても又、未知のウィルスが遠からず人類を襲うという科学者もいます。しかし、どのような苦難の中にあっても、メルケル首相のように、人間の権威のもとではなく、神の権威のもとに、お互いに尊重し合いながら生き抜く道が私達人類には開かれています。主イエスが今も福音を語ってくださっているからです。主は今も、私たちキリスト者の内に住んで下さり、私たちを用いて「福音を告げ知らせて」(20:1)おられます。主イエスはご自身を排斥し殺そうとしている権威者達にも、福音を告げ知らせていました。神の権威、愛の権威のなんと大きく広い事か。ここに、共に神の権威のもとに生きる道があることを思い、神を賛美せずにはおられません。